

# 存在論における Truthmaker の役割

小山虎 (Tora KOYAMA)

日本学術振興会特別研究員 PD (慶應義塾大学)

現代形而上学の地位が以前に比べると格段に高まっていることは、いまや周知の事実だと思われる。だが、それと共に、現代形而上学の基本的枠組みも議論の対象とされるようになった。こういった議論は、「メタ形而上学 (metametaphysics)」、ないし「メタ存在論 (metaontology)」と呼ばれており、現代形而上学の新たな一分野を形成しつつある。本発表の目的は、メタ存在論的観点から、Truthmaker の概念が存在論において大きな役割を果たし得ることを論じることである。とりわけ、Truthmaker の概念を用いて、性質の存在論における唯名論的立場を擁護する新たな議論を提示することによって、抽象的対象の存在論に関して Truthmaker の概念が果たし得る役割を検討する。

まず本発表で注目するのは、van Inwagen (2004)の議論である。そこで van Inwagen は、性質の存在論を極めて単刀直入な仕方でも主張している。その議論は、「自分が存在すると信じていないものに対して言及すべきではない」という原則に基づいている。日常言語にせよ科学の言語にせよ、性質にまったく言及せずに済ますことは不可能である。そして存在汎化によって、性質に言及する文から性質を存在量化した文が得られる。ここで上記の原則から、我々は性質が存在することを受け入れるべきである、という結論が得られる。

もし性質に言及する文を、抽象的対象に一切言及しない文にパラフレーズする一般的手続きが得られれば、この結論は導き出されない。だが、そのような一般的手続きが得られる見込みは、今のところまったくない。したがって、我々は性質が存在することを受け入れなければならない。このように van Inwagen は主張している。

この議論に対し、Dorr (forthcoming)は、存在文の用法には「表面的 (superficial)」用法と「基礎的 (fundamental)」用法という二つの用法があり、性質をはじめとする抽象的対象についての存在文は「表面的」用法の場合にのみ真であるに過ぎず、それが「基礎的」に用いられるならば偽であると主張する。存在文の用法の区別を導入し、抽象的対象についての存在文は単に一方の用法において真であるに過ぎず、それはなんら存在論的コミットメントをもたないと主張する戦略は、Dorr だけではなく、他の唯名論者も採用する標準的な戦略であり、たとえば Hofweber (2005)も同様の戦略を採っている。

しかしながら、この戦略が望ましい結果をもたらすためには、二つの用法の違いをきちんと規定し、その上で、抽象的対象についての存在文が真となるのは、存在論的コミットメントをもたない方の用法においてのみであることを示さなければならない。この点に関して、Dorr の方針 (抽象的対象 A に関する存在文 P を「もし A が存在するならば P」と書き換える)も Hofweber の方針 (存在文は意味論的に不確定であり、

文脈によって確定される)も、不十分だと言わざるを得ない。と言うのも、どちらの方針も、二つの用法の違いが何に基づいているのかがまったく明らかでないからである。このため、抽象的対象についての存在文が存在論的コミットメントをもつように用いられると偽になることも明らかでない。

さらに次のように論じることもできる。抽象的対象についての存在文が、一方の用法で偽だとしても、少なくとももう一方の用法では真であろう。ここで、前者の用法だけが存在論的コミットメントをもつと考える理由はない。むしろ、後者の用法は、van Inwagen が示したように、我々のふつうの用法である。ならば、こちらの用法での「存在論的コミットメント」こそが真に重要だと考えるべきではないだろうか。

以上の議論は、唯名論的立場を擁護することは困難であることを示している。しかし、メタ存在論的観点に立つことによって、新たな議論を行うことが可能となる。

メタ存在論的観点からすれば、存在論的コミットメントの基準を存在量化に求めることは、ひとつのメタ存在論的前提に過ぎず、別のメタ存在論的前提を採用することも不可能ではない。むしろ、別の存在論的コミットメントの基準として Truthmaker の概念を用いた基準を採用する哲学者も少なくない。

一般に、Truthmaker の概念を用いる哲学者の多くは、普遍の存在を認め、Truthmaker を個物と普遍から構成される事態と同一視する。しかし、Melia (2005) が指摘するように、Truthmaker を、「ある真なる文がスーパーヴィーンする存在者」と解するならば、唯名論者にとっても Truthmaker は何の問題も引き起こさない。たとえば、「a が F である」が真だとすると、この文の Truthmaker は F である個物 a そのものに他ならないと主張できるからである。このようにして唯名論者は、性質についての存在文は個物の存在にしかコミットしていないと主張することによって、van Inwagen の議論を反駁することができる。また、存在論的コミットメントをもたない存在文とは、真であるために Truthmaker を必要としない文であると規定すれば、Dorr や Hofweber の議論の基礎を与えることができる。

もちろん、Truthmaker の概念には多くの問題があることも知られている。しかしながら、あるメタ存在論的前提では抽象的対象が不可欠であるのに対し、別のメタ存在論的前提が抽象的対象を拒否する合理的な方法を与えてくれるのであれば、後者についても十分に検討されるべきである。

## 参考文献

Dorr, C., (forthcoming), "There Are No Abstract Objects," in Hawthorne, J., T. Sider and D. Zimmerman (eds.), *Contemporary Debates in Metaphysics*, Blackwell.

Hofweber, T., (2005), "A Puzzle about Ontology," *Noûs*, **39**, 256-283.

Melia, J., (2005), "Truthmaking without Truthmakers," in Beebe, H., and J. Dodd (eds.), *Truthmakers*, Oxford University Press, 67-84.

van Inwagen, P., (2004), "A Theory of Properties," in Zimmerman, D., (ed.), *Oxford Studies in Metaphysics*, **1**, 107-138.